

初めて拝見しました。出演者の大人も子どもも一緒に楽しそうで、お客様も楽しんでおられました。

作詞・作曲・振付と全部自分たちでやっておられるんですね、素晴らしいです。

まず、完全暗転から始まり、抽象的な舞台で、題名の通り、箱のなかから生まれてくる白い人々、赤ちゃんの鳴き声、というプロローグ。

そのあと、上下花道に分かれての現実の姉妹、喧嘩、家出、そして、本舞台には、先ほどの箱が移動されて違う場所の設定となり、白い人々も着替えて現実の世界の人に、と展開が軽妙でした。

しかし、しっかりした物言いでもやりとりも出来ているのに、歌になると、感情が希薄になり、声が小さくなりました。ミュージカルや歌入り芝居の弱点ですが、台詞から歌へのつなぎ（いわゆる前奏部分）が、「準備」になってしまって、テンションが下がったように感じました。そして、歌詞の「心」をもっと歌ってください。登場人物それぞれに視点が絞られていって、それがすべて歌で表現されているので、よけいにそう思いました。せっかくの歌詞が観客の心に響きません。演技力はあるのですから、すべて歌ではなく、台詞など、違うアプローチでやる人もあってよかったのではないかと思います。

自虐ネタや繰り返しネタが盛り込まれ、関西人らしいコミカルなタッチでテンポよく進んでいきますが、中盤以降、演出が立ちすぎて、演者の腑には落ちていなかったのではないのでしょうか、自然な演技でなく、やらされてる感がありました。また、時々、ツッコミの台詞が聞き取れず、笑えない部分もありました。

子どもたちの無駄な着替えに正当性をもたせているところなど、よく練られているのですが、ちょっと無理やりでしたね。

ラストの「箱」、観客に想像を委ねたのですが、あまり効果的ではなかったように思います。登場人物それぞれが、新しく1歩を踏み出したのはそれまでの流れでよくわかります。なので、ダンスでフィナーレでもよかったし、演出的に「箱」に帰りたいのであれば、もっと違う表現があったのでは、と思いました。

今後、歌の「心」を語る稽古を積んで、さらなる演技力アップを目指してください。期待します。